

漢語接頭辞「旧」と「新」：その意味論と音韻論

田中真一*・上野誠司**

The Sino-Japanese Prefixes *Kyuu-* 'Old' and *Shin-* 'New':
at the Semantics-Phonology Interface

TANAKA Shin'ichi and UENO Seiji

<SUMMARY>

The present paper discusses the interaction between the semantic properties and the pitch patterns in prefixation in Tokyo Japanese, with particular reference to the Sino-Japanese prefixes *kyuu-* 'old' and *shin-* 'new'. In nominal compounding in Tokyo Japanese ($N_1+N_2 \rightarrow N_1N_2$), as is well known, the second element (N_2) determines the accent pattern of the entire word (N_1N_2). In prefixation, on the other hand, this rule does not always apply. Some [prefix + noun] structures involving *kyuu-* or some other prefixes do not follow the rule, showing exceptional accent patterns. Analyzing 203 examples, we demonstrate that the exceptional accent patterns pertaining to those prefixed nouns are motivated by the semantic properties of the prefixes and the base nouns. It is also claimed that the prefixed nouns are similar to noun phrases in certain respects, and that especially the structure [*kyuu-* + noun] has both word-like and phrase-like phonological properties.

1. 序：複合語アクセント規則と接頭辞

東京方言における語形成のアクセントは、[語 + 語 → 語] の構造においても、[語 + 接尾辞 → 語] の構造においても、それぞれ(1)と(2)のように後部要素（第2要素）が全体の型を支配し、前部要素（第1要素）はその音声的自立性を失うことがよく知られている（ \uparrow はピッチの下がり目（アクセント核）を、 $\bar{}$ はアクセント核のないこと（平板式アクセント）を表す）。

(1) a. デ \uparrow ジタル + カ \uparrow メラ →

デジタルカ \uparrow メラ
ボラロ \uparrow イド + カ \uparrow メラ →
ボラロイドカ \uparrow メラ
b. い \uparrow セ + お \uparrow んど →
いせお \uparrow んど (伊勢音頭)
か \uparrow わち + お \uparrow んど →
かわちお \uparrow んど (河内音頭)
(2) a. ぶ \uparrow つり + が \uparrow く →
ぶつり \uparrow がく (物理学)
せ \uparrow いぶつ + が \uparrow く →
せいぶつ \uparrow がく (生物学)
b. ど \uparrow くじ + せい $\bar{}$ い →
どくじせい $\bar{}$ (独自性)

* 工学部言語教育センター・別科日本語研修課程講師

** 人間環境学部環境文化学科講師

2001年9月29日受付

ろ[↑]んり+せ[↑]い →
 ろんりせい[↑] (論理性)

一方、「新-」「旧-」などを含む〔接頭辞+名詞〕のアクセントを見ると、「新-」が(1)や(2)と同様、(3)のように自立性を失い後部要素の名詞部分が全体の型を支配するのに対し、「旧-」を含む語においては、(3)と対応する(4)の型と、(3)とは異なりアクセント句が分離する(5)の型とが併せて存在するようである(↓はピッチ下降後の再上昇、つまり、アクセント句の分離を表す)。

- (3) 新石[↑]器 新情[↑]報 新体[↑]制
 新条[↑]約 新制[↑]度 新人[↑]類
 (4) 旧石[↑]器 旧情[↑]報 旧体[↑]制
 旧条[↑]約 旧制[↑]度 旧人[↑]類
 (5) 旧↓↑ソ[↑]連 旧↓↑国鉄[↑] 旧↓↑満[↑]州
 旧↓↑浦和[↑]市 旧↓↑ボ[↑]ンベイ 旧↓↑住[↑]専

また、同じ「旧X」という語形においても(6)のように、2種類の型が共存する例も見受けられる。

- (6) a. 旧校[↑]舎 旧病[↑]棟 旧社[↑]屋
 旧メ[↑]ンバー 旧領[↑]地
 b. 旧↓↑校[↑]舎 旧↓↑病棟[↑] 旧↓↑社[↑]屋
 旧↓↑メ[↑]ンバー 旧↓↑領[↑]地

このように、接頭辞「新-」「旧-」を含む語の音声パターンは非対称を示しているわけであるが、ここで(3)~(6)のデータを整理すると、以下のような問題が浮かび上がる。

- (7) a. なぜ「旧X」に2種類の型が存在するのか。
 二つの型の違いは何か。
 b. なぜ「新X」は「旧X」と対応せず一つの型しか存在しないのか。
 c. なぜ「旧X」では同じ語形においてゆれが見られるのか。

本稿では、(3)~(6)にみられるアクセント型の不

均衡が一貫して、「接頭辞-名詞」間の意味構造によって説明できることを指摘する。また後半では、(5)や(6b)のピッチ・パタンと、句イントネーションとの関連性について論じる。

2. 調査

2.1 手順

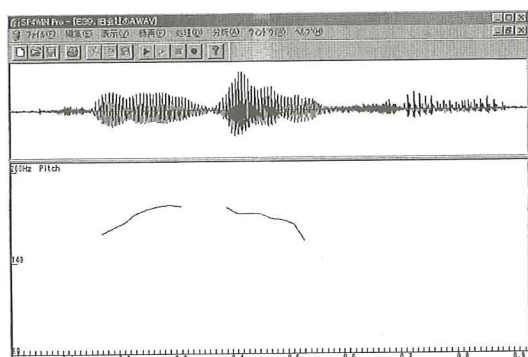
『毎日新聞データ検索サービス』および『スーパー・ニッポニカ』(小学館)から接頭辞「新-」「旧-」を含む表現を203例抽出した。内訳は、「新-」を含む表現が151語、「旧-」を含む表現が52語である。名詞部分は2形態素(3モーラ以上)のものを対象とした。それは後部要素の長さ(右枝分かれ構造)によるアクセント句分離を排除するためである(詳しくは、窪田1995を参照)。接頭辞を含むそれぞれの語は、複数の文(平均5~6文)のうちの一文中に含まれるようにした。これは前後の文脈と〔接頭辞+名詞〕の音調との対応を調査するためである。

これらの203例を、東京出身の男性アナウンサー(T.K. 34才)が、ニュース原稿を読むようなスタイルで朗読し、それをマイクを通してMD(SONY; Minidisc Recorder MZ-R 900)に収録した。録音後、音響分析(NTTアドバンステクノロジー; 音声工房 pro)を行った。

2.2 結果

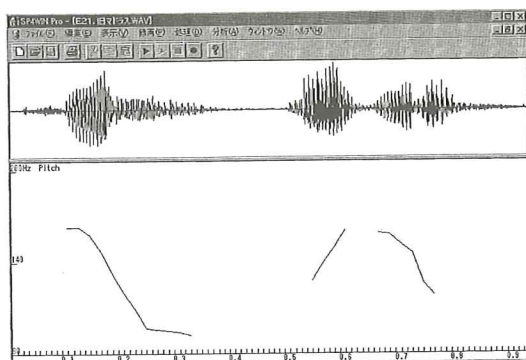
ピッチにおける結合型と分離型の意味は、以下の通りになった。

- (8) 結合型:(3)(4)(6a)
 名詞Xが指す複数の対象のうちの「旧い」(または「新しい」)部分を示す。
 限定修飾の構造
 (9) 分離型:(5)(6b)
 名詞Xの指すある特定の対象が、かつてのものであり、現在はXではないことを示す。
 非限定修飾



k y u u g a i s y a
旧 会 社

図1



k y u u m a d o r a s u
旧 マ ド ラ ス

図2

(8)において「旧X」は、名詞Xが指す複数の対象全体から「旧」という部分集合を抽出するはたらきをしている。つまり、意味的には「複数あるXにおける古い部分」ということになり、「旧」がXを限定修飾する無標の構造を有している。このような意味構造は基本的に(1)や(2)における構造と同様であり、したがって、ピッチも同様の現れ方をすると解釈できる。

これに対し(9)は、限定修飾ではなく「かつてのX (かつてXと呼ばれていたもの)」という意味を表し、同時に「現在はXではない」ことを含意している。さらに特徴的なのは、Xは名詞一般で

はなく、固有名詞をはじめとする特定の(一つの)対象を指す名詞である。このような複雑で有標の意味構造と、「旧」「X」双方の情報の重要性により、アクセント句が分離するといえる。言うまでもなく、一般的な語構造((1), (2), (4))においては前部の情報が弁別的であり、それにより、限定修飾の構造を有する。

3. 分 析

3.1 「旧」・「新」の意味と音調

以上のような「旧↑X」の意味構造により、Xの部分には(5)のような固有名詞が現れやすいことが予測されるが、文脈によっては、たとえば(6b)のような例も生起する。この場合Xは、Xの指示対象一般(種: kind または type)ではなくある特定の(一つの)個体(object または token)を指し、意味解釈は「その個体(旧X)は、現在はXではなく別のものである(あるいは、なくなってしまった)」となる(種と個体の区別に関しては、例えば、Carlson 1977, Jackendoff 1983などを参照)。このような意味解釈は、Xが固有名詞を指す(5)にもあてはまる。

以上を(4)~(6)の具体例をもとに検証してみる。

(4)の「旧石器」は通常、複数種類のある「石器」という集合のうちの「旧」の部分という意味解釈しかされないで、(8)の結合型として現れる。これに対し(5)の「旧ソ連」は、「ソ連」というある特定の国について言及し、それが「かつてのもの」であり、今は「ソ連」ではないことを意味しているので(9)の分離型として実現される。「旧ソ連」に(8)の結合型「きゅうソ 連」が許容されないのは、固有名詞である(つまり一つのみ存在する)「ソ連」から、ある部分(「旧」の部分)を抽出するという解釈が、そもそもあり得ないことによる。^{注1}

(6)においても結合型と分離型の意味解釈は基本的に同様である。

「旧校舎」が(6a)の結合型として現れる場合は、

複数ある校舎のうちの「旧いもの」という解釈、つまり、限定修飾の解釈がなされ、一方、それが(6b)の分離型として現れる場合は、ある特定の校舎が「かつてのものであった」すなわち、今は校舎ではなく別の建物（あるいは廃墟）となっているという解釈がされることになる。

「旧X」という表現において、結合型のみ(4)と分離型のみ(5)のようにどちらか一方の型しか許容しない場合は、Xの部分が意味的、すなわち語彙選択的に、(8)か(9)いずれかの解釈しか許容しないためそのようになる。他方、同一の語形から結合型・分離型両方の音型が許容されるのは、Xの部分が意味的（語彙選択的）に(8)(9)いずれの文脈とも共起できるためそのようになるのである。

つまり、(6)において2種類の型が生じるのは、同じ語形において意味構造・語構造が異なるためであり、具体的には、「旧」がXを限定修飾する構造の場合は(6a)の型が、非限定修飾の構造においては(6b)の型が現れるわけである。

以上より、「旧↑X」という分離型が生起する直接的な要因として関与しているのは、Xの種類（固有名詞か否か等）ではなく、「旧」と「X」との意味関係であることが明らかになった。一見したところ重要な生起要因のようにみえる「固有名詞か否か」などの情報は、じつは、このような意味構造を介して二次的に関与しているにすぎないといえる。

このような観点に立つと、なぜ「旧X」に2種類の型が存在するのに対し、「新X」には結合型の1種類しか存在しないのかということも説明できる。それは「新X」という表現が存在するには「新X」以外の「X」の存在が前提になるのが一般的だからである。つまり、(10)のように、「新X」は普通、複数のXから「新」の部分について言及する限定修飾の読みのみを許容するためである。¹²

- (10) 大阪 ← 新大阪
システム ← 新システム
校舎 ← 新校舎

ウルトラマン ← 新ウルトラマン

以上より、音声における「新-」と「旧-」との非対称性は、接頭辞と後続する名詞Xとの間の意味関係が関与していることが明らかになった。

[接頭辞+名詞]の構造において、その意味構造が音韻構造に関与することが示されたわけである。

3.2 「旧X」における要素弁別性と句音調との関わり

次に、接頭辞(旧)、名詞(X)それぞれの要素における、対応関係と弁別性について考察する。限定修飾の構造を有する(4)(6a)における「旧」が(11)のように意味的に「新」と対応しているのに対し、非限定修飾(5)(6b)の「旧」は(12)のように「現」と対応しているといえる。さらに、注意深く観察すると、「旧X」における二つの構造には、弁別性にも違いがみられるのがわかる。(下線部が弁別性を持つ部分である)。

- (11) a. 旧情報 旧体制 旧制度 旧人類
 旧石器
 b. 新情報 新体制 新制度 新人類
 新石器
- (12) a. 旧国鉄 旧ソ連 旧住専 旧校舎
 旧メンバー
 b. 現JR 現ロシア 現*** 現公民館
 現非メンバー

前部が弁別的な(11)の構造に対し、後部も同時に弁別的である(12)の構造においてはアクセント句が分離している。(14)に示すように、一般に語のレベルにおいては、句のレベル(13)とは異なり、弁別・対比させたい要素を音声的に部分的に卓立させるような現象は見られない。たとえば(14b)のように、たとえ「カセットテープ」の「テープ」の部分に対比・弁別させる文脈においても、その部分のみを卓立させることはできず、「カセットテープ」全体が一語として卓立されるのが一般的なの

である(窪田1998)。このような観点から再び(12)を分析すると、(12)の例はアクセント句分離という「語」としての特徴と同時に、後部要素の弁別性による卓立、つまり、(13b)の句音調と同様の構造を有しているという見方ができる。このように、意味的に有標の構造を有する(12)においては、語音調と句音調を併せ持つという解釈が成り立つ(↑はその直後の語が弁別部分であることを表す)。

(13) a. ↑しろいチョーク]ではなく、↑あおいチョーク]をください。

b. [しろい↑紙]ではなく、[しろい↑紙]をください。

(14) a. ↑カセットテープ]ではなく、↑ビデオテープ]をください。

*カセットテープ]ではなく、↑ビデオテープ]をください。

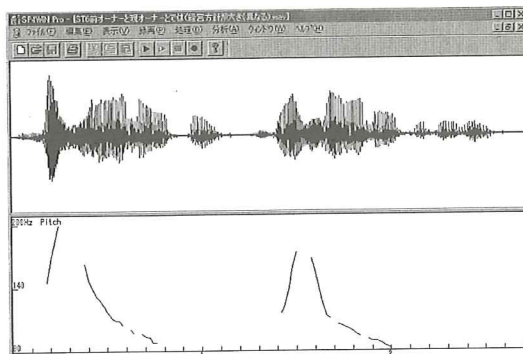
b. [カセット↑テープ]ではなく、[カセット↑コンロ]をください。

*[カセット↑テープ]ではなく、[カセット↑コンロ]をください。

このような予測は、後部要素の卓立した場合のみならず、前部要素(接頭辞)を対比させた文脈(15a)においても、同様に成り立つ。前部(接頭辞)が対比された[接頭辞+語]の構造において、音調は語(14a)ではなく、むしろ句(13a)とまったく同様のふるまいを見せる。また、「現オーナー」という同じ表現(15)においても、(15a)のように前部が弁別的な文脈か、反対に(15b)のように後部が弁別的かによって大きく音調が異なり、それぞれ弁別的な箇所卓立がおかれる(それぞれ図3・図4を参照)。

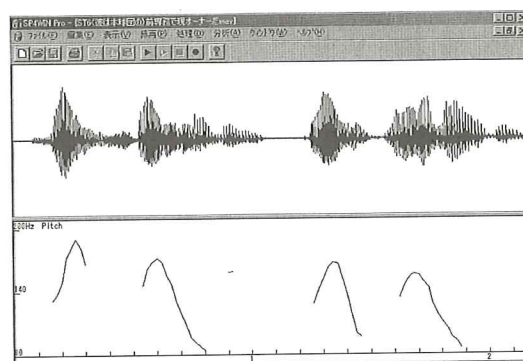
(15) a. [現↑オーナー]と、[前↑オーナー]とでは、経営方針が異なる。=(13a)

b. 彼は、[現↑オーナー]で、[前↑専務]だ。
=(13b)



zenoonaato genoonaatodewa
ぜんオーナーと げんオーナーとでは

図3



zen semmude gen oonaada
ぜん せんむで げん オーナーだ

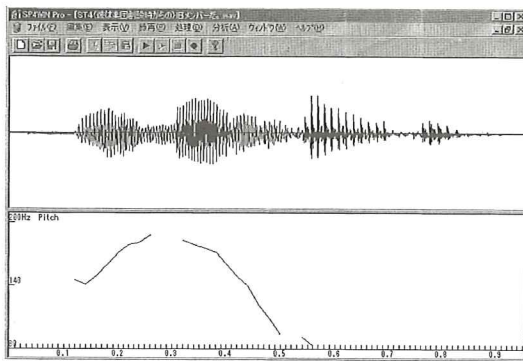
図4

以上のことは、文法的には語(1語)として認識されている[接頭辞+名詞]の構造が、特定の意味構造下においては音声的に句(独立した2語)と同様のふるまいを見せることを示している。このような意味において、[接頭辞+名詞]の構造は特異性が見られるのである。

4. 結びと課題

本稿では、音声的に非対称をみせる「新」[旧]という [接頭辞+名詞] が、じつは意味的な非対称によって生産されることを示し具体的には、接頭辞とそれに後続する名詞との間の意味関係が音調を支配することを明らかにした。また、後半では、[接頭辞+名詞] が語形成一般、すなわち「語」における音調と異なり、むしろ「句」のそれと共通性のあることを提示した。「旧メンバー」という語を例にとり、以上をまとめると、それは

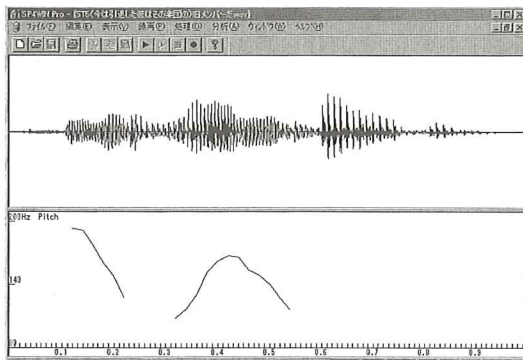
意味構造一卓立によって、図5～7の3つの音調が実現される。図5は語としての特徴のみを、図7は句としての特徴のみをそれぞれ持ち、図6は、語としての特徴と句としての特徴を併せ持っているといえる。



kyuume n baa da
きゅーめんばーだ

図5

語 句
○ ×
(結合：無標) ---



kyuumen baa da
旧 メン ばー だ

図6

語 句
○ ○
(分離：有標) (後部卓立)

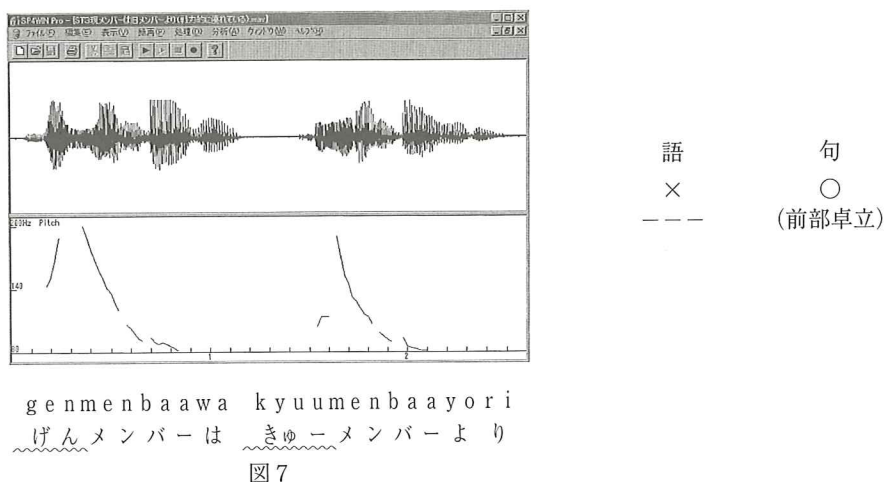


図7

本稿ではおもに「新」「旧」という接頭辞の分析を行ってきたが、以下の[接頭辞+名詞]の構造においても、意味と音調との間に一定の関係がみられる。

- (16) a. どろがくねん — どろがくねん
 (同学年)
どろメンバー — どろメンバー
 (同メンバー)
ほんかいぎ — ほんかいぎ
 (本会議)
ほんばしょ — ほんばしょ
 (本場所)

ここにおいても、結合型(16a)が、名詞Xの指示対象全体からの部分抽出という無標の語構造を有しているのに対し、分離型(16b)の名詞Xが、それによって指されるもの一般(kind)ではなく、ある特定の個体(object)を表しているという意味において、「新」「旧」における意味-音声の対応関係との共通性が見られる。[接頭辞+名詞]全体を統一するような、意味・音声間の対応関係の一般化が今後の研究の課題である。

付記：

本研究は文部科学省科研費奨励研究A「日本語

音声教育に向けてのリズム・アクセント・イントネーションの基礎的研究」(課題番号：13780168)の助成を受けている。

注.

1) まれにはあるが、固有名詞Xを限定修飾する構造も見受けられる。「軽井沢-旧軽井沢」などがそれに当たる。ここでいう「旧軽井沢」は軽井沢全体の一部であり、「旧くから存在している軽井沢」という意味で軽井沢一般と区別されているものを指す。このため音調は分離型(9)ではなく、結合型(8)の「きゅうかるい」ざわ」のように実現される(cf. 郡司2000)。

2) ごくまれに「新X」の分離型も見受けられる。これは「旧X」における分離型と同様、特定のXのみを言及し、「Xによって指されるある特定の対象が、かつては存在せず、今、新たに存在する」という意味構造を有する。たとえば、「カリメロ」というテレビアニメが終了し、新たに全く別の「カリメロ」が現れた場合、そのみを言及し、「しんカリメロ」(新カリメロ)というパターンをとる場合がそうである。

参考文献

秋永一枝(1985)『NHK発音アクセント辞典』NHK出版.

- Carlson, Gregory N.(1977) *Reference to Kinds in English*, Ph.D dissertation, University of Massachusetts, Amherst. Published in 1980 by Garland, New York.
- 郡司隆男 (2000) 「日本語の名詞句に関するメモ」
TALKS No. 3, 1-27. 神戸松蔭言語科学研究所.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition* MIT Press.
- Kageyama, Taro(1982) “Word Formation in Japanese”
Lingua 57, 215-258.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 郡 史郎 (1997) 「[当時の村山首相]の2つの意味と2つの読み—名詞句の意味構造とアクセントの弱化について」文法音声研究会編『文法と音声』くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (1998) 『音声学・音韻論』西光義弘編日英語対照による英語学演習シリーズ1 くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (2001) 「語順と音韻構造：事実と仮説」
文法音声研究会編『文法と音声Ⅲ』くろしお出版.
- 松井理直 (1998) 「制約単一化に基づく日本語音韻論」大阪大学博士論文.
- 宮島達夫 (1997) 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄編『日本語文法体系と方法』ひつじ書房.
- Poser, William(1990) “Word-Internal Phrase Boundary in Japanese” in S. Inkelas and D. Zec (eds) *The Phonology-Syntax Connection*, 279-288. University of Chicago Press.
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』大修館書店.
- 杉本孝司 (1998) 『意味論1—形式意味論—』西光義弘編日英語対照による英語学演習シリーズ5 くろしお出版.
- 杉藤美代子 (1997) 『「花」と「鼻」』日本語音声の研究5 和泉書院.
- 田中真一・窪菌晴夫 (1999) 『日本語の発音教室—理論と練習』くろしお出版.
- 吉村弓子 (1990) 「造語成分『不・無・非』』『日本語学』第9巻12号, 36-44. 明治書院.